

社会史の方法を生かした歴史教育の研究

— 社会結合を視点として —

A Study of History Education Based on the Methodology of Social History :
from the Viewpoint of "Sociability"

島田 龍太

(奈良県橿原市立光陽中学校)

I. はじめに

中学校の歴史教育の問題として、子どもの意識と学ぶ知識とが繋がった状況にないことが挙げられる。このことが、子どもに「なぜ歴史を学ぶのか」という疑問を抱かせてきた。授業では、子どもにとって時間的・意識的に隔たりのあるできごとを、いかに興味を抱かせつつ理解させるかに力が注がれてきた。そして、ここで得られる多くの知識は、子どもにとって、押しつけられたものとして受け取られてきた。そこには、子どもの視点に立った学ぶ目的が見えてこない。学ぶ目的が、あいまいであったり、閉ざされていたりする限り、「なぜ」という子どもの疑問が消えることはない。

このような子どもの置かれている状況を打開するには、子どもの思いや意識とつながる、また、学ぶことで現在の問題や社会がわかる歴史教育が必要である。歴史が子どもにとって突き放された過去としてではなく、自らの意識のなかに生きていることをつかませたい。このようなことから、社会史の方法に目を向けた。

この社会史の方法とは、明確に定義されたものではないが、これまでの歴史学で等閑視されてきた、新しい歴史認識の枠組みととらえることができる。本研究は、社会史の方法のなかでも、特に社会結合理論を取り上げ、この理論に基づく歴史授業の開発をめざすものである。

II. 社会結合の概念と意義

1. 社会結合の概念と歴史学的意義

社会結合（ソシアビリティ）は集合心理学や社会学の概念として用いられてきたものである。これを歴史学の概念として最初に用いたのが、

モーリス・アギュロンである。以後、社会結合は、新しい歴史学の概念として心性（マンタリテ）と重なりつつ発展してきた。阿部謹也氏は、「人間の生きる世界はモノを媒介として結ばれた世界と目に見えない絆によって結ばれた世界という二つの関係で言いつくされている。しかしながら目に見えない絆によって結ばれた人と人との世界についてはほとんど研究の鍬が入れられていないといつてよいだろう。」¹⁾と述べている。

社会結合は、人と人との共通の集合心性の上に立って結び合う関係のことであり、見えないきずなによって結ばれる人と人との関係とその変容を歴史のなかに探ることを通して、人間の具体像をとらえようとする概念である²⁾。

2. 歴史教育における意義

歴史教育において社会史の成果はどれほど反映されているだろうか。社会史の視点・方法に基づく先行授業実践分析の結果、次のことが指摘できる。ひとつには、日本史において心性に基づく授業の成果は認められるが、社会結合を取り入れた授業がみられないこと。また、ひとつには、通史への投げ込み的な授業が多く、単元として構成されたものが少ないことである。この点を踏まえて社会結合に基づく授業を単元として構成することの意義について述べる。

「生きた人間」を把握するには、心性への着目がなされるべきである。しかし、その際に、子どもの意識と歴史を媒介するものがあるかどうか重要である。つまり、心性に支えられた人間たちの結びの場が、現在にも通じるものならば、必ず子どもの意識と歴史とを切り結ぶことができる。その方法が社会結合である。

また、社会史を踏まえた授業であっても投げ込み的な授業であれば、結局は、通史的構成のなかへと収斂することになる。社会史の担う使命は、これまでの歴史学で等閑視されてきた新しい歴史認識の枠組みによる歴史の読み直しである。従って、投げ込み的な授業ではなく、社会史の方法に基づき単元として構成されなければ、この使命を十分に果たすことはできない。ここに社会結合に基づく授業を単元として構成する意義が存在する。

この社会結合を歴史教育に取り入れる視点を示せば、次のようになる。現在にも受け継がれている、また性格を変えながらも残っている、子どもと関わりの深い社会結合に着目する。そして、それを支えてきた長い間変わらない、また長い間かけて変わった心性を歴史の深層から探り出す。このような社会結合と心性の結びつきは、子どもに「自分のなかに生きる過去」を気づかせるとともに、過去を学ぶことによって現在の問題や社会がわかることにもつないでいく。子どもの日常と歴史意識をつなぐきずなが社会結合である。

Ⅲ. 家族の社会結合

1. 家族の社会結合の教材論的有効性

本研究では、教材として家族の社会結合を取り上げた。ここでは、家族の社会結合の教材論的有効性について、内容構成、授業内容、子どもにおける必要性の3点から示すこととする。

まず内容構成から見ると、社会結合をもとに日本史を構成するならば、対象が歴史の各時代を通して存在するものでなければならない。その点で家族は、形や意識を変えながらも、歴史のなかに常に存在するものである。それ故、家族のきずなとその変化に着目すれば、各時代の特質に迫ることが可能となる。

次に授業内容として、歴史学においても歴史教育においても、子どもの存在は等閑にされてきた。家族の社会結合は、これまで扱われてこなかった子ども自身の存在に目を向けるものである。子どもにとって自分の存在が、どう歴史のなかで位置づけられ、どう変化してきたかを

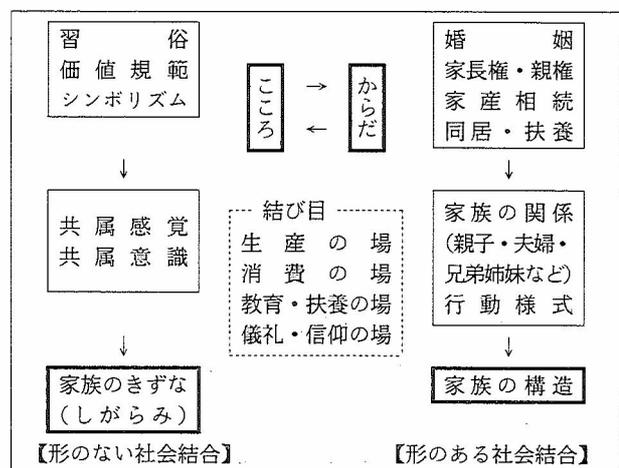
考えさせるものである。従って、子どもの問題意識と歴史とを切り結ぶことができる。

最後に子どもにおける必要性の観点から、ひとつには、現在の家族のありようの大きな変化が挙げられる。このなかで、子どもの非行、子育てへの不安、親の教化力の低下、離婚の増加、老後の不安などの問題が生まれてきた。歴史のなかの家族はどのような問題に直面し、どう乗り越えてきたのか。このようなことが、歴史のなかの家族を通して見えてくるならば、それは現在の家族のありようを見つめ直すひとつの鏡となる。また、ひとつには、人とのつきあい方がわからない子どもの増加が挙げられる。今日の学校現場で生じる、いじめ、不登校、暴力や友人間のトラブルなどの背景には、人とのつきあい方、接し方がわからない子どもたちが多くなっているという現状が指摘されている。家族の社会結合を通して、人とのきずながどのようにして生まれ、強まっていくのかということにも気づかせることができる。

以上の理由から家族の社会結合を教材として扱うこととした。

2. 家族の社会結合のとらえ方

家族のありようは、とかく自明のものにとらえられがちである。しかし、家族は歴史のなかで変化してきたものであり、これからも変化していくものである。それでは、このような歴史のなかの家族をどのようにとらえていくのか。このことをまとめたものが〔図1〕の「家族の社会結合の概念図」である³⁾。



〔図1〕家族の社会結合の概念図

「形のない社会結合」とは、共属感覚・意識に支えられる、見えないきずなで、「こころ」(心性)の領域である。「形のある社会結合」とは、家族の関係や行動様式としてあらわれる、見えるつながりで、「からだ」(身体性)の領域である。これら家族をとりもつ場として、生産や労働の場などの結び目がある。そして、家族は「形のある社会結合」に拘束されるという側面をもつが、また、「形のない社会結合」を自ら選び取り「形のある社会結合」を変化させてもきた。これが、家族の変容としてあらわれる。

3. 家族の社会結合の教材化の視点

子どもの問題意識とつながる、古代・中世・近世・近現代の家族の社会結合を資料として選ぶ。それを現在の家族意識を糸口にして、なぜそうしなければならなかったか、なぜそういう意識が起きたのか、その時代の観念から明らかにする。そして、各時代の家族のきずなのありようや特質を引き出し、「家族は時代を映す鏡」として単元に位置づける。

家族の社会結合を分類すると、親子・夫婦・兄弟姉妹・祖父母と孫といった関係が挙げられる。このなかで、最も子どもたちの意識とつながりやすい親子の社会結合の資料分析から、古代・中世・近世・近現代の親子のきずなの変容を概観する。そして、それを目安としながら各時代の親子以外のきずなのありように広げ、家族のきずなの全体像に迫る。そして、この全体像をもとに時代の特徴を指摘し、その特質に迫る家族の社会結合の単元を構成する。

IV. 近世家族の社会結合の授業構成

1. 単元のねらいと構成

近世は、庶民にまで家意識が広まる時代である。この家意識の広がりの中なかで、家族のきずなのありようも変化した。その変化を支えたのは、どのような家族意識だったのか。このことを、老人と子ども・夫婦・親子の関係をもとに探ることを目的とする。

(1) 単元の構成

「近世家族の社会結合」(全11時間を想定)

①『江戸の福祉』(3時間を想定)

②『自由奔放に生きる女性』(4時間を想定)

③『子どもの発見』(3時間を想定)

④単元のまとめ(1時間を想定)

(2) 小単元の構成と概要

①『江戸の福祉』(3時間を想定)

a. 小単元の構成

導入 現代家族の問題

展開1 「棄老伝説」と「拾い子伝説」

展開2 江戸の福祉

終結 家の永続

b. 小単元の概要

近世、老人と孫の関係は、対の関係から再生の関係へと変化した。この老人と孫の再生の関係が祖霊信仰を体系化し、家の存続・永続を可能とする循環再生システムをつくりあげた。そして、家は家族成員の一生を保障する福祉施設としての役割を果たすものとなっていった。家意識に対し、古い時代の不合理な考えといったマイナスの評価が多い。しかし、近世に強まる家意識は、庶民が安心して過ごせる一生のために創出した知恵の結晶と読み取ることができる。このように家意識は、庶民の選び取りの結果広まったとする解釈をもとにした。

②『自由奔放に生きる女性』(4時間を想定)

後に具体的授業モデルを提示する。

③『子どもの発見』(3時間を想定)

a. 小単元の構成

導入 父親・母親

展開1 子どもの発見

展開2 武士の育児

終結 家族のきずな

b. 小単元の概要

「七つまでは神の子」とする意識の変化や「子どもは末をたのむ生きがい」とする意識の強まりが示すように、近世は「子どもの発見」の時代である。それは、子どもを小さな大人と見る中世的な子ども観とは異なるものである。この子ども観の変化も家意識の強まりが基盤となっている。子どもは大切な家の跡取りなのである。そして、この時期に父子の結びつきはたいへん強ま

りをみせる。育児、遊び相手、労働や学問の手ほどきと、父親も子育てに深く関わっていった。このような親子のきずなのありようを、近世後期の下級武士家族の生活をもとに示すこととする。

「子どものことは母親」という意識が未だ強い今日、武士が子どもと寄り添って生きる姿から、家族のきずなを強めるものは体験の共有であることに気づかせる。

④単元のまとめ

3つの小単元を振り返りながら、「現在の家族と江戸時代の家族では、何がどのように似通っていて、何がどう違うのか」を考えさせる。そして、「現在の家族が、江戸時代の家族に見習う点があるとすればどういう点か」を話し合わせる。

2. 近世家族の社会結合の授業モデル

(1) 小単元名：『自由奔放に生きる女性』

(2) 小単元のねらい

江戸時代、庶民においては、嫁入り婚や見合い結婚へ移行する過渡期である。その前期は、自由恋愛による結婚が中心であった。そのような時期であるからこそ、家制度や夫に忍従することなく自由奔放に生きる女性たちが多かったことに気づかせる。

(3) 小単元の構成（4時間を想定）

導入 したたかな妻たち
展開1 子供組・若者組・娘組
展開2 村内婚・村外婚
展開3 自由奔放に生きる女性
終結 閉じこめられる妻

(4) 到達目標

A. 江戸時代の村の子どもにとって、一人前の村人となることが大きな目標であった。

A-1. 江戸時代の村の子どもは、七歳ぐらいから子供組に入り、村の成員となるための訓練を受けた。

A-2. 江戸時代、子供組を脱した者は、若者組・娘組に入った。ここでは、寝食を共にしながら、村人として必要な労働の訓練などを受けた。

B. 江戸時代頃より村に見られる「ナワバリ」

の慣行は、村外に嫁いだ娘に対する制裁と承認と祝福を表す儀礼であった。

B-1. 若者組や娘組の大切な目的は、労働訓練と結婚の相手探しであった。

B-2. 若者は、仲間の力を借りながら恋愛により結婚相手を見つけ出した。

B-3. 村外への嫁入りは、従来のならわしに反するとともに結婚相手の減少であったから制裁の対象となった。

B-4. 「ナワバリ」は、村外への嫁入り行列の先々で若者などが通せん坊をする制裁の慣行であった。

B-5. 「ナワバリ」は祝儀を受けることなどで、はずすことが前提であり、しかも結果的に見送ることとなる。従って、村外への嫁入りの承認と祝福の意味をも含んだ慣行であった。

C. 江戸時代の庶民の結婚は、若者組・娘組がとりもつ村内婚から、親の意識が反映される、仲人を介した見合いによる村外婚へと変化していった。

C-1. 結婚は、若者組と娘組がとりもつ村内婚が一般的であり、村内婚では親であっても干渉はひかえた。

C-2. 江戸時代、仲人を介した見合いによる村外婚が庶民に広まった。

C-3. 村外婚では、嫁選びに親の意識を反映させることができた。

D. 江戸時代は、庶民においても家意識が強まった。このことが、村外婚への結婚形態の変化を促した。しかし、このような移行期だからこそ、家に埋もれることなく自由奔放に生きる女性の姿が多く見られた。

D-1. 家意識の強まりは、結婚の形態をも村外婚へと変えていった。

D-2. 家意識が結婚の形を変えても、結婚への意識までは簡単に変えられない。従って、江戸時代は未だ自由奔放に生きる女性の姿が多かった。

D-3. 庶民において、女性が夫や家への従属を余儀なくされるのは、明治時代に入ってからのことである。

(5) 授業過程

	教師の発問・指示・説明	資料	生徒の期待される回答・認識
導入	<ol style="list-style-type: none"> 何年か前に「亭主元気で留守がいい」というテレビのCMがはやったことがある。同じ思いの主婦も多かったのだろう。さて、この思いとは具体的にどんな思いだろうか。 なんとしたたかなと思うだろうが、次の資料を見てみよう。これは室町時代のはやり歌だ。何と歌ったものか。 人間の考えることは時代が変わっても似ているようだ。さて、「亭主元気で」はまだまして、最近の女性の強さには驚かされる。次の資料を読んでみよう。 離婚の多さもさることながら、熟年離婚での妻の割り切り方をどう思うだろうか。 「亭主元気で留守」なら笑ってもいられる。しかし、離婚ともなると事態は深刻だ。現代の夫婦のありようが特別なのか、起こるべくして起こっているのか。そのあたりを歴史のなかに探ってみよう。 	<ol style="list-style-type: none"> 室町奉行の日記 現在の離婚 	<p>○亭主がいなければ生活に困るが、亭主の世話や相手をするのはたいへんだ。元気で働けて、留守がちなら伸び伸び気楽に暮らせるという思い。</p> <p>○亭主が留守ならば隣近所の奥さんとお茶でも飲みながら世間話をいたしましょう。</p> <p>○したたかだ。 家のことをすべて妻に任せてきた夫に責任がある。相性、価値観の違いがそうさせる。</p>
展開1	<ol style="list-style-type: none"> これから江戸時代の村に生きる庶民夫婦の姿を結婚と離婚を通して探っていく。しかし、その前に、村人にとって村はどのようなところだったかを考えてみよう。 まずここでは、村の子どもの成長の様子から村の姿をのぞいてみよう。 資料Cは昭和時代の写真である。江戸時代の村のならわしを受け継ぐ光景だが、一体何をしているのだろうか。 実は、子供組の写真で、祭行事に臨んで、年長者が気合いをいれている様子だ。 江戸時代はほとんどの村に子供組があった。子どもは七歳ぐらいで仲間入りして、村の成員となるための訓練を受けることになっていた。 次の2つの写真も昭和のものだが、やはり、江戸時代のならわしを受け継いでいる。どんな様子かわかるか。まずDについて、わかることを言ってもらおう。 Eの写真はどんな様子を写したのか。 先ほどの子供組と比較して、どのようなグループと想像できるか。 これは若者組と娘組と呼ばれるもので、十四・五歳で子供組を脱した後はここに入り、寝食をともにした。ここで一人前の村人になるために必要な労働の訓練などが行われた。 さて、これらのことから村は子どもにどんな期待をかけていたと思うか。 子どもは村の子として育てられ、また教育されたということである。 	<ol style="list-style-type: none"> 子供組 若者宿 娘宿 	<p>○ガキ大将グループが年下を整列させて、いじめている様子だ。 年下の子どもに説教している様子だ。</p> <p>○ふんどしだけの裸の青年ばかりがいる。 みんな作業をしている様子だ。 楽しそうに話している人もいる。</p> <p>○囲炉裏のまわりに若い女性6人、おばあさんが囲炉裏の番をしている。奥におじさんの姿がある。 ○現在の青年団のようなものであって、Dは村の若い男性の組織、Eは村の若い女性の組織だろう。</p> <p>○一人前の村人となって、村を担ってほしいという期待があった。</p>
展開2	<ol style="list-style-type: none"> ここに嫁入りの様子を写した一枚の写真がある。この写真に解説をつけてくれないか。 ただでさえ歩きにくい雪の日に、何のために縄を張っているのだろうか。 いろんな解釈ができそうだ。これからこの縄の意味を解いていこう。 前に見た娘組の写真があった。その解説の文章が資料Gだ。どんなことがわかるだろうか。 どこの若者が訪れるのだろうか。 どうも2つの集団の目的には結婚の相手を見つけることもあったようだ。江戸時代の若者組について 	<ol style="list-style-type: none"> ナワバリ 娘宿解説 村内婚 	<p>○雪のなかを花嫁を先頭にして行列が歩いてくる。その先に縄が張られている。 ○イタズラで通せん坊をしている。 この縄を越えたなら花嫁は嫁ぎ先の家の一員であるという境界線だと思う。</p> <p>○娘宿には若者が訪れることも多く、結婚の仲立ちをする場所だったとある。 ○村の若者組の若者。 ○村内婚が多かった。 若者組と娘組の交際から恋愛が生まれ結婚へ進むの</p>

<p>展 開 2</p>	<p>書かれた資料Hを見てわかったことを言ってもらおう。</p> <p>7. 村内婚とは村人どうしの結婚で、村外の人との結婚は村外婚という。</p> <p>8. そろそろ、縄の話に戻そうか。縄を持っていたのはどんな人だった。</p> <p>9. かつては縄は若者がもつことが多く嫁入り行列の先々に張られたという。この行為は「ナワバリ」といって村の外に嫁ぐ娘に対して取られる行為だった。</p> <p>10. かつては、村の娘は誰と結婚するのがならわしだったのか。</p> <p>11. 若者たちは娘が村外へ嫁ぐことをどのように受け取っただろうか。</p> <p>12. その娘に対して張られる縄にはどんな意味があっただろうか。</p> <p>13. ただし、この縄は祝儀をもらうことなどで、はずすことが前提でもあった。制裁である縄を解くというのはどういうことだろうか。</p> <p>14. 縄を張ることで、若者たちは行列を見送ることにもなる。制裁、承認とともに祝福の気持ちもこもったならわしだった。</p>	<p>F. ナワバリ</p>	<p>がならわしだった。 村内婚には大人たちの介入が認められなかった。</p> <p>○おばさんが持っていた。</p> <p>○同じ村の若者と結婚することが多かった。</p> <p>○村の娘が他の村に取られた。 結婚の相手が少なくなった。 娘が若者たちを裏切って嫁いだ。</p> <p>○嫁に行かせたくない。 嫁入りの妨害。 娘へのいやがらせ。 娘への制裁。</p> <p>○縄を張っての制裁はするが、やはりめでたいことなので結果的には許そうとするならわしだと思う。</p>
<p>展 開 3</p>	<p>1. 江戸時代も前期は若者組や娘組がとりもつ村内婚が多かった。しかし、「ナワバリ」の風習が示すように村外婚が次第に多くなる。</p> <p>2. 村内婚と違って村外婚では相手がよくわからない。また村外の相手と知り合うこともまだ少なかった。それでは村外の人とはどのような形で結ばれたのか。</p> <p>3. 次の文章から仲人や見合いの登場を確かめよう。村外婚から村外婚に移っていった理由を読みとろう。</p> <p>4. それでは、村内婚と村外婚、当時者にとって最も大きな違いは何だろうか。</p> <p>5. 江戸時代の家意識の強まりが村外婚を促したと言えるようだ。</p> <p>6. こうして家に、夫に、がまん強く従う女性がつくられたと思うだろう。ところが次の2つの絵を見てもらおう。資料Jの二人は夫婦である。絵からわかることを言ってもらおう。</p> <p>7. 怒る夫の前で泣く女房、傍らには荷物がまとめられている。どんな場面か。</p> <p>8. 我々の江戸時代の夫婦に対するイメージはこういうものではなかっただろうか。それでは資料Kだが、これは離婚を話し合う場面だ。解説できるだろうか。</p> <p>9. 夫は一番左の人物、夫に何やら迫るのは妻側のおやじ、障子のそばで頭をかくのは離婚の仲裁役か。おやじは夫に何を迫っているのだろうか。</p> <p>10. 実は、資料Jで妻が手にして泣いていたものを、資料Kでは夫に書かせようとしている。何だろうか。</p> <p>11. 江戸時代は離縁状と呼び、三行半で書いたことから三くだり半とも言った。夫のあわてた姿に妻のせいせいした様子。どうもイメージに合わない。この絵がどこまで真実か他の資料をあたってみよう。</p> <p>12. 三くだり半の実物の写真とその読み下した文章がある。写真では三行半ということがよくわかる。</p> <p>13. どのような内容が書いてあるか。</p> <p>14. 誰が誰に対して書いているか。</p> <p>15. この形式にわれわれの思い違い、離婚は夫の思いのままという解釈が生まれたようだ。次の資料を見てみよう。3つの例からどんな事実がわかるか。</p>	<p>I. 村外婚</p> <p>J. 『世中百首 絵鈔』より</p> <p>K. 『伊呂波短歌』より</p> <p>L. 三くだり半</p> <p>M. 妻からの離婚</p>	<p>○仲人に頼んで、見合いをして結婚した。</p> <p>○対等の家がらを選ぶ風潮があらわれたから。 親の意見を反映させられるから。 生活圏が広がったから。</p> <p>○恋愛と見合いの違い。 個人の意志より親や家の意志が入ってくること。</p> <p>○夫の前で妻が泣いている様子。 妻の傍らには荷物がまとめられている。 夫の前にはたばこ盆とすずりがある。</p> <p>○夫が妻を追い出す場面。 離婚の場面。</p> <p>○妻が右側に立っている。やはり傍らに荷物がある。 男性3人の関係が説明できない。</p> <p>○慰謝料を出せ。 夫の態度を責めている。</p> <p>○離婚届。</p> <p>○離婚するということ、今後誰と結婚しても構わないということ。</p> <p>○夫末吉が妻だけに対して書いている。</p> <p>○例1ではダメ亭主に実家の加勢を得て離縁状を書かせる妻。 例2では前途不安な男に対して結婚前に離縁状を書かせている。</p>

展 開 3	<p>16. 江戸時代の女性は家や夫に従ったという姿とはほど遠い様子が現れた。当時の状況を説明した次の資料を読んでみよう。</p> <p>17. 離婚した女性に対する周囲の眼はどのようなものであったか。</p>	N. 妻の「飛び出し離婚」	<p>例3では浮気した妻が前の亭主がよかったと縁切り寺に駆け込んでいる。</p> <p>○離婚した女性へのマイナスのイメージはない。労働力が期待され再婚の申し出も多かった。</p>
終 結	<p>1. なぜわれわれには忍従する妻というイメージが強かったのだろうか。その理由を資料から考えよう。</p> <p>2. 資料の内容をつかんで発表しよう。</p> <p>3. それまでの母とは誰のことか。</p> <p>4. 子どもの母であっても家の母ではない状態がつづく。このような嫁に対してみんなはどんなイメージを抱くだろうか。</p> <p>5. この資料は宗門改帳というものだが、誰がつくらせたものか。</p> <p>6. 村内婚から村外婚への移り変わりを支えた家意識とはもともとどの階層からはじまったと思うか。</p> <p>7. 幕府がつくらせた宗門改帳には、内容にも武士の思いが入ったのだろう。</p> <p>8. 広まる家意識は、結婚の形をも変化させた。しかし家や夫に安易に従属しないこれまでの意識は残っていた。そのことが自由奔放な女性の姿にあらわれている。</p> <p>9. 最近、離婚の増加が問題となっているが、1975年から1997年にかけて離婚率は1.0から1.8へと増加している。1.0とは千人当たり1組が離婚ということだ。ここで明治時代の離婚率をみておこう。</p> <p>10. 最も高いのはいつで、率はどれだけか。</p> <p>11. 今と比べても高い。それでは最も数値が減少するのは、いつのことだろうか。</p> <p>12. この1898年は男子中心の家制度を定めた旧民法が施行された年である。この表からどんなことが言えるだろうか。</p> <p>13. 江戸時代の夫婦の姿を結婚と離婚を中心に探ってきた。これらからどんなことがわかっただろうか。</p> <p>14. 最後に、江戸時代の夫婦像と現在の夫婦像を比べて気づいたこと、結婚について思ったことをノートに書いてまとめなさい。</p>	<p>O. 「宗門改帳」の母</p> <p>P. 明治期の離婚率</p>	<p>○自分の子どもが家長となってはじめて母と認められる。</p> <p>○姑が母である。</p> <p>○家の母になるまで、子どもが跡を継ぐまで姑に耐えて夫に耐える嫁というイメージをもつ。</p> <p>○幕府が寺院に命じてつくらせた。</p> <p>○武士からはじまったものだった。</p> <p>○最も高いのは1883年の3.39だ。</p> <p>○2.27から1.50に減少する1898年から1899年だ。</p> <p>○明治に入っても前半は離婚が今よりも多かった。この表から推測すれば、江戸時代はもっと離婚が多かった。</p> <p>○旧民法によって離婚が減った。</p> <p>○江戸時代でも、もともと結婚は恋愛結婚だった。家意識の強まりから見合いや村外婚が増えていった。離婚の数が今よりも多かった。</p> <p>○女性からの離婚も多かった。</p> <p>○離婚へのマイナスイメージは少なかった。</p>

〔資料の出典〕 (資料H・Nについては具体例として提示した。)

資料A 室町奉行の日記：北川忠彦「狂言に観る」(朝日新聞学芸部『中世の光景』朝日新聞社、1994年、p.101)

資料B 現在の離婚：森安彦『古文書が語る近世村人の一生』平凡社、1994年、p.12。

資料C 子供組：埼玉県秩父郡荒川村「天狗祭り」(坪井洋文著者代表『日本民俗文化大系 第10巻 家と女性一暮らしの文化史一』小学館、1985年、p.184)

資料D 若者宿：歴史教育者協議会編『歴史地理教育』1984年9月、No.371、「歴史のなかの子どもたち」より。

資料E 娘宿：長崎県五島(坪井洋文著者代表『日本民俗文化大系 第10巻 家と女性一暮らしの文化史一』小学館、1985年、p.405)

資料F ナワバリ：石川県輪島市大野町(坪井洋文同上書、p.472)

資料G 娘宿の解説：坪井洋文同上書、p.405。

資料H 村内婚：竹田旦『日本大百科 第14巻』小学館、1988年、p.288。

資料I 村外婚：竹田旦同上書、p.282。

資料J 『世中百首絵鈔』より：高木侃『三くだり半と縁切寺』講談社、1992年、p.221。

資料K 『伊呂波短歌』より：高木侃同上書、p.221。

資料L 三くだり半：高木侃「家族の絆—離縁状と親子契約文書にみる」（高木昭作編『朝日百科 歴史の読み方 6 文献史料を読む・近世』朝日新聞社，1992年，p.51）

資料M 妻からの離婚：高木侃同上書，pp.51～55。

資料N 妻の「飛び出し離婚」：高木侃『三くだり半』平凡社，1987年，p.16。

資料O 「宗門改帳」の母：宮下美智子「近世『家』における母親像」（脇田晴子編『母性を問う，歴史の変遷，下』人文書院，1985年，pp.13～14）

資料P 明治期の離婚：高木侃『三くだり半と縁切寺』講談社，1992年，p.39。

資料H 村内婚

資料N 妻の「飛び出し離婚」

同一村落内で行われる婚姻をいい、村外婚と相対する。かつては村は独立性、閉鎖性が強く村内婚が多かった。村の男女は同輩集団を組み、集団同士の交際を展開した。土地によっては民家の一室を借りて寝宿、娘宿とし、そこを拠点に交流するものもあった。こうした交際から恋愛が生まれ結婚へと進むのが古い習わしであった。この交流のなかでは他村の若者が村の娘に近づくことは激しく拒まれた。

村内婚では、大人たちの介入が認められず、婚約・結納・祝言なども簡単にすましたり省略したりした。婿入婚も村内婚でなければ行いえなかった。

そもそも江戸時代の離婚は夫の専権離婚ではなく、むしろ妻の「飛び出し離婚」がかなりあったから離婚が多かったと考えるからである。なぜなら、当時庶民とりわけ農民の家庭では、妻も夫とともに働かざるをえなかったから、女性の地位はその労働力の故に、必ずしも低くなく、ときに嫌いな夫のもとを飛出して実家に戻っても、さほど抵抗なしに受入れられたからである。しかも離婚後もその労働力が期待され、再婚の申込みがあちこちからあったと想像される。離婚して実家に帰った「出戻り（離婚婦）」は、一度結婚したことがいろいろの経験を積んだものと評価されこそすれ必ずしも「きず物」扱いをうけることはなかった。むしろ離婚及び離婚婦にマイナス・イメージはなかったといえよう。

V. おわりに

今後の課題として、作成した授業モデルが、子どもの歴史意識を呼び起こせるか、実際に授業を行い、その有効性と問題点を明らかにすることである。そして、社会結合及び心性の概念と授業構成についての検討をさらに深めることである。

また、内容研究において、本研究は近世しか手がけることができなかった。残る古代・中世・近現代の家族の社会結合単元を作成し、家族の社会結合に基づく日本史構成を築くことである。なぜなら、家族の社会結合はその変化の過程を重視するものであり、近世のみの段階では現在との対比のレベルに過ぎないからである。時代を通した家族の変容がつかめたとき、近世の家族の姿もより浮き彫りとなり、さらには、現代の家族の抱える問題が「なぜ起こってきたのか」という問いに答えることにもなる。

その他、教材化の際の研究資料の問題が挙げられる。「親子の社会結合」の分析では、結び目として「教育・扶養の場」が中心となり「生産の場」や「消費の場」の資料発掘が十分でなかったこと。加えて、資料の乏しい古代家族の社会結合をどう単元に位置づけていくかという問題も残されている。

〔注及び引用文献〕

- 1) 阿部謹也『社会史とは何か』筑摩書房，1989年，pp.201～202要約。
- 2) 社会結合の概念については、以下の文献を参考とした。
 - ・柴田三千雄，二宮宏之他編『シリーズ 世界史への問い 4 社会的結合』岩波書店，1989年，p.1。
 - ・二宮宏之「〈sociabilité〉論のヴェクトル」（阿部謹也他編『社会史研究1』日本エディタースクール出版部，1982年，p.26）
- 3) 二宮宏之「ソシアビリテ論の射程」（同編『結びあうかたち ソシアビリテ論の射程』山川出版社，1995年，pp.11～12）を参考に作成した。